# 第２章　喜界町の食の現状

## １　急激に進む少子高齢化社会

本町では昭和 40 年代の人口減少が著しく、その後も減少傾向を示しており過疎・少子化・高齢化の問題が顕在化してきています。

本町の国勢調査人口は、昭和 45 年は 12,725 人で対昭和 40 年比 10.6%の減少であり、昭和 50 年は 11,464 人で対昭和 45 年比 9.9%の減少、平成 2 年は 9,641 人で対昭和 60 年比 9.9%の大幅な減少となっています。直近の調査では令和 2 年が 6,629 人で対平成 27 年比 8.1%の減少と依然として減少傾向が続いています。

65 歳以上の高齢者人口の増加傾向も変わらず、現在は高齢者比率も 40%を超えており、典型的な超高齢化社会を迎えています。

## ２　食に対する価値観・ライフスタイルの多様化

近年、ライフスタイルの多様化が進み、食生活にも変化が起きています。一人で食事をする「孤食」や、同じ食卓に集まっていても、家族がそれぞれ別々の料理を食べる「個食」も増えてきています。また多くの人は多忙化により、料理を作る時間、食べる時間が短くなっています。

食事は栄養を摂るだけでなく、コミュニケーションの場としても重要です。楽しく上手に調理することで得られる充足感や、食事を通じて家族や他の人々とつながる喜び等、生活者が食に求める価値観はより多様化しています。

## ３　核家族化や共働き家庭の増加による「孤食」の増加

平成 27 年度の国勢調査によると本町の世帯数は、核家族が 1,814 世帯で全体の 5 割以上を占めています。祖父母と同居しているなど拡大家族が多かった頃は、子どもが一人で食事をする機会は少なかったと考えられます。

しかし現在は、核家族化や共働き家庭の増加が進み、親が仕事で不在などの理由で子どもが一人で食事をしなければならない「孤食」の状況が増えています。